

彼女を罪人にしたのは誰

奨励	宮部 素子【みやべ・もとこ】
奨励者紹介	日本キリスト教団天満教会伝道師

さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。

(ルカによる福音書 7章36―50節)

名前のない「罪深い女」

今日の聖書箇所が登場する罪深い女性は、「マグダラのマリア」ではないか、と考える人もいます。それが本当のことかどうかを証明することはできませんが、私の頭にも、そのような考えがありましたので、今日の聖書箇所を読みながら「マグダレンの祈り」という映画を思い出していました。この映画は、アイルランドに実際にあった「マグダレン修道院」という施設が舞台です。この施設は、修道院によって運営されていて、もともとは、貧しさのために娼婦となった女性たちを保護する目的で作られたものでしたが、時代が移っていくにしたがって、未婚で子どもを出産する女性たちのための施設となりました。このような言い方をすると聞こえがよいのですが、映画のなかで描かれていたのは、施設に入っている女性たちに対する虐待とも言えるような、シスターたちの態度や過酷な労働が課せられている「マグダレン修道院」の実態で、見終わった後も心が重くなるような映画でした。現在の日本では考えにくいことですが、アイルランドの社会において、「マグダレン修道院」にやってくる女性は、その社会から「罪人」とみなされていたためにこのようなことが起こっていたのです。

映画のなかでのエピソードを一つ紹介しますが、主人公の女性がこの施設に入ったときに、彼女が名前を変えられるという場面がありました。すでに施設には彼女と同じ名前の女性がいたというのがその理由です。このエピソードからも、施設の女性たちが人間としての扱いを受けていなかったことをうかがわせます。

今日の聖書箇所が登場する「罪深い女」にもこの映画の女性たちに重なる部分があります。ルカによる福音書には、「罪深い男」と人びとに言われる人物も登場するのですが、彼には「ザアカイ」という名前があるのです。一方、この女性の名前は記されていません。この女性の名前は物語の初めから終わりまで明かされることはなく、彼女がどんな人で、どんな暮らしをしていたのかも全く記されていません。このことは、物語の舞台となっているこの町で、彼女は名前を呼ばれることもなく、どんな人間であるかも関係なく、周りの人びとから、ただ「罪深い女」と呼ばれ続けていたことを表しています。彼女は同じ町で一緒に暮らしている人間ではなくて、人びとにとっては「罪深い女」という存在でしかなかったのです。聖書の物語のなかで「罪」というのは、その社会の正しさから外れているという意味です。そして、罪人ではない人びとは、罪人と呼ばれる人びとと接触することを避けます。それが、聖書の物語の社会のなかでは、正しいことであったからです。そのため、「罪人」となった人は、社会から疎外され、辛い状況に置かれることになります。誰も好んで「罪人」として生きることは選ばなかったでしょう。「罪深い女」と呼ばれるこの女性の「罪」が何なのか、聖書には記されていませんが、彼女もまた、自分から「罪人」になることを選んだわけではなかったでしょう。彼女には、罪人にならざるを得ない状況があったと考えられます。その彼女を「罪人」にしたのは、彼女を「罪深い女」と呼んだ周りの人びとでした。そして、「罪深い女」と呼ばれ続けた女性自身もまた、自分を「罪人」の殻に閉じ込めて生きていたのです。つまり、彼女を罪人にしたのは、彼女の周りの人びとと彼女自身でした。そんな彼女のこれまでの人生を変える出来事が、イエス様との出会いによって起こりました。

後ろから近づく

イエス様は、彼女のいる町へやってきて、ファリサイ派の人・シモンの家へ招かれ、食事の席に着いていました。そこへ彼女がやってきて、後ろから、イエス様へと近づいたのです。このとき、人びとは、横たわって食事をしていたと考えられています。そこで女性は、イエス様の足元へ「後ろから」つまり、イエス様の背中側から近づき、そして、イエス様の足に香油を塗ったのです。特に、「後ろから」ということに注目すると、この彼女の行いには二つの意味があると理解することができます。一つ目は、イエス様に分からないようにひっそりと後ろから近づく彼女の姿は、それまでのひっそりと生きていた彼女の生き方そのものである、ということです。二つ目は、イエス様に分からないように近づいたことは、彼女は、自分のイエス様に対する行いが気づかれることを期待していないこと、つまり、彼女の行いは全く自発的なものであったということです。

会食の席に入り、他の人に触れるという彼女の行いは、当時の社会の正しさで考えれば、本来「罪人」である彼女が行うべきではないことでした。けれども、彼女はそれを自発的に実行したのでした。このことは、「自分は罪人である」という意識をもって生きていた彼女が、自分を解放した出来事だったのです。ここで、彼女を罪人にしていた彼女自身は変わりました。では、彼女を罪人にしていた周りの人びとはどうだったのでしょうか。

罪深い女なのに

イエス様とイエス様の足に香油を塗る女性の姿は、たくさんの画家が絵画として描いています。それだけ、この聖書の場面から美しさを感じる人は多いということなのでしょう。けれども、このときの彼女の行いは、決してそのような美しいものではありませんでした。彼女は、食事の席にはふさわしくない人間で、食事の席に着いていた人びとからは、「なぜ、ここにいるのか」と咎められるような視線を浴びていたことでしょう。彼女の存在によって、イエス様を招いての食事の席の雰囲気は、ずいぶん気まずくなっていたと想像できます。ただし、聖書の世界のなかでは、客人を招いての食事の場に他の人が出入りすることは、習慣としてあり得たことです。ここでは、彼女が「罪人」であったことに問題があったのです。

イエス様を招いて、食事の席を設けた張本人のファリサイ派の人・シモンも、自分の家に入ってきた女性と、彼女の振る舞いを止めないイエス様に否定的です。彼は、このように思いました。「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と。この言葉からは、ファリサイ派の人・シモンが、女性を「罪深い」と思っていたこと、預言者は彼女が罪深いことを見抜く力があること、そして、預言者はそんな女性には体に触れさせないはずだと思っていたことが分かります。ゆえに、彼は、女性のことを咎めようとしないイエス様は、預言者ではないと思ったのでしょう。また、女性のことを「罪深い女」と思いながら、その女性がイエス様に触れることを止めなかったことから、彼は、自分を清く保つことは心がけていたけれど、他の人が「罪人」となることには無関心であったという印象を受けます。

罪人を作らない世界

シモンの思いを見抜かれたイエス様は、彼に一つの譬(たとえ)を語られました。イエス様の話のなかでは、「二人には返す金がなかった」とこと、「金貸しが両方の借金を帳消しにしてやった」とことが注目すべき点です。この金貸しの姿は、イエス様の姿に重なります。ファリサイ派の人・シモンの招待に応じたことと、「罪深い女」の行為をさせるままにしておいたことは、イエス様がどちらの相手も等しく受け入れていたことを示しています。ちょうど、たとえ話のなかの二人がどちらも返すお金がなかったように、イエス様の目から見れば、シモンも女性も同じ人間だったのです。けれども、シモンにはそうではなかったようです。シモン自身とイエス様と罪深い女性の存在は、彼のなかで同等ではありません。彼は、自分の周りの人間をそれぞれ自分の基準で区別して生きていたのです。さらに、シモンは、周りの人だけではなく、自分自身をも自分の基準で測りながら生きていたのです。そのシモンに向かって語られたイエス様の言葉は、「彼女が罪人であることは、律法に則ればそのとおりなのだろう。けれども、『罪人』となることが悪いことだとするならば、彼女が罪人とならないように、そして、誰も罪人とならないようにしていくことが本来の正しさなのではないか」というシモンへの問いかけです。シモンの生き方は、罪人となったのはその人の責任、イエス様が女性のことを見抜けなかったのもイエス様の責任という考え方からくるものでした。そして、彼は、自分が愛する人とそうでない人を区別しています。そのような、自分の正しさで人を計るような生き方は、自分自身がその正しさにとらわれていく生き方で、自分自身をも裁くことになります。そのような生き方は、貧しい人間関係しか生まれず、愛も少ないのです。罪人と言われた女性のように、自分が解き放たれていくこともないのです。イエス様が女性に言われた「あなたの罪は赦された」という言葉は、ファリサイ派の人・シモンにも必要な言葉です。

他の人を批判して、「罪人」という存在を作り出していくことは簡単です。それは聖書の物語のなかでも、私たちの今生きている世界でも変わりはありません。この物語は、私たちの周りで、「罪人を作り出すのではなく、誰もが罪人とならないような世界を作り出しているか、自分を罪人にしていないか、周りの人を罪人にしていないかと、私たちに問いかけています。「罪深い女性」は、イエス様に触れていくことで、「罪人」の殻から自分を解放しました。彼女の周りの人びとを解放するのは、イエス様の言葉です。「あなたの罪は赦された」という言葉は、罪人を作り出してしまふ社会を解放する言葉なのです。自分を、周りの人を罪人にすることがないように、イエス様の言葉に耳をすませていたいと思います。

